特　集

祝 九州新幹線全線開業1周年

～鹿児島change 鹿児島challenge 新幹線が変える鹿児島～

平成23年3月12日に全線開業し、3月で1周年を迎える九州新幹線。移動時間の大幅な短縮により、九州北部や関西・中国方面からの交流人口が増加し、県外からのお客さまに鹿児島の食、自然、歴史といったあふれる魅力に触れていただきました。

今回の特集では、新幹線の全線開業に伴う変化や、県内各地における開業後の取り組みについて紹介します。

◆ダイヤ改正（3月17日）

3月17日に九州新幹線のダイヤが改正されます。改正に伴い、山陽・九州新幹線直通の「みずほ」「さくら」が増発されるほか、所要時間が短縮されることにより、今後ビジネスや観光がより便利になると期待されています。

【県内各駅の1日あたり停車本数増減】　（カッコ内は増減後の停車本数。－は増減なし）

県内停車駅	山陽・九州新幹線直通列車（みずほ、さくら）	九州内列車（さくら、つばめ）	合　計
鹿児島中央駅	+16	-14	+2（78）
川　内　駅	+14	-14	—（68）
出　水　駅	+14	-15	-1（46）

【主要区間の所要時間（最速）】

○鹿児島中央～新大阪間　　3時間42分（現行より3分短縮）
○鹿児島中央～博　多　間　　1時間17分（現行より2分短縮）

九州新幹線全線開業効果

昨年3月の全線開業以来、九州新幹線の利用者数は順調に推移しています。全線開業に伴う効果として、開業当初は東日本大震災の影響などによる旅行需要の低迷により、本県への入込客は前年を下回っていましたが、大型連休を中心に5月以降は、関西・中国地方、北部九州などから多くの観光客が訪れるなど、鹿児島、指宿、霧島の主要観光地を中心に本県への入込客は前年を大きく上回っています。

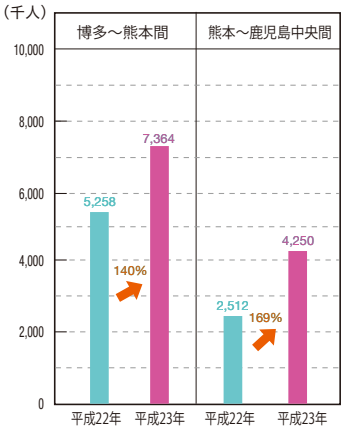
また、主要観光地以外の地域でも新幹線を組み合わせた旅行商品のコースに組み込まれるなど、徐々に効果が表れつつあります。

さらに、観光以外の面でも、移動時間の短縮により、県民が通勤、通学など日常的に新幹線を利用する機会も増えているほか、「全線開業前に比べ営業活動の範囲が広がった」とする企業もあるなど、県民の利便性の向上や企業などにおける商圏拡大につながりつつあります。

全線開業日(平成23年3月12日)以降 12月末までの九州新幹線 利用者数累計(前年比)

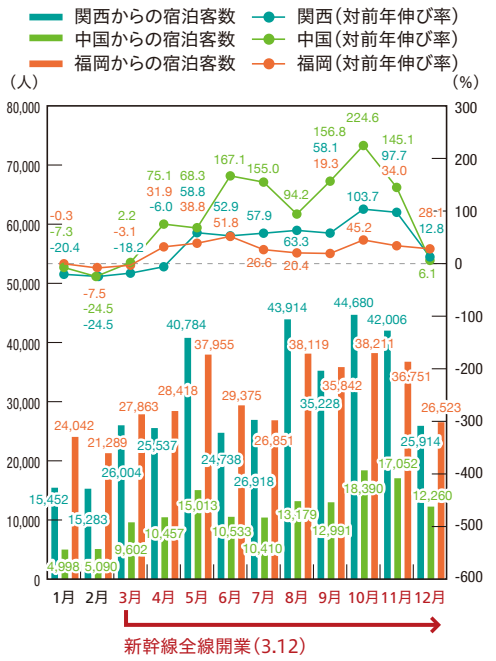
※博多～熊本間の前年は、博多～鳥栖間の「リレーつばめ」「有明」の利用実績

※熊本～鹿児島中央間の前年は、新八代～鹿児島中央間の「つばめ」の利用実績

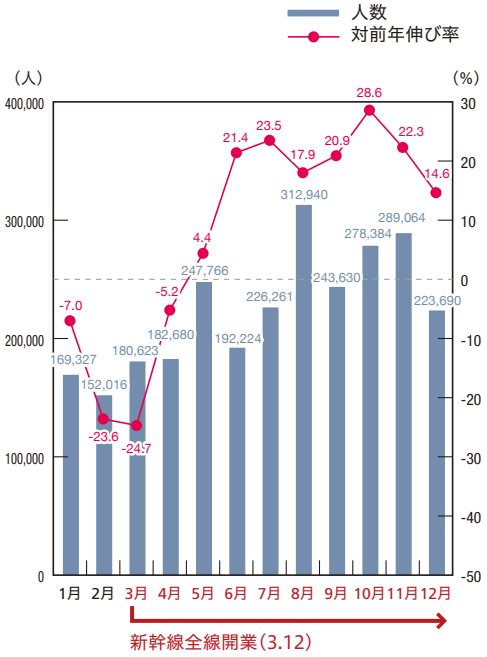


【出典】JR九州

平成23年 新幹線沿線(関西・中国・福岡)からの宿泊客数推移



平成23年 主要宿泊施設の宿泊客数推移



【出典】県観光動向調査（調査対象／ホテル・旅館66施設）

修学旅行で鹿児島へ

これまで、北部九州方面での修学旅行を毎年実施していた岡山市の京山中学校では、九州新幹線の全線開業に伴い、昨年の5月に初めて修学旅行で鹿児島を訪れました。「新幹線の停車駅でもある出水市で、民泊を体験。生徒からは、移動時間が短くなった分、活動時間が増えて充実した修学旅行になったと好評でした。民泊先での温かい歓迎も生徒たちにとってはうれしかったようです」と話すのは徳山順子校長。同校では平成24年度も鹿児島県内での修学旅行を予定しています。「来年度は、民泊体験での触れ合い体験はもちろんのこと、知覧での平和学習やグループごとにテーマを決めて班別研修などに取り組む予定です」と話してくれました。

農家民泊先での風景

団体での鹿児島旅行

兵庫県の姫路市から、1泊2日の日程で姫路造園建設業協会の15人のメンバーと鹿児島を訪れた礒田博也さん。「今朝、姫路駅を出発して来ましたが、鹿児島も近くなりましたね。今日は、鹿児島市内を中心に回り、明日は知覧に行く予定です。今夜は、黒豚を食べる予定。鹿児島の焼酎は、関西でも有名なので楽しみですね」と鹿児島の観光と食を満喫して帰ると話してくれました。

「仙巌園は庭園造りの勉強になります」と話す礒田さんと協会のメンバー

個人での鹿児島旅行

滋賀県から鹿児島を訪れた馬場綾さんと清水友恵さん。「鹿児島に来たのは、今回が初めてです。九州新幹線が全線開業して、時間的にも九州が近くなったと感じました。桜島も見てみたかったので満足です」と馬場さん。「鹿児島市内で史跡巡りやまち歩きを体験しました。温泉にも入りましたよ。すごく気持ちよかった」と清水さん。次に鹿児島を訪れるときには、霧島や指宿にも行ってみたいと話してくれました。

「鹿児島市内では、史跡も見ました」と話す清水さん(左)と馬場さん(右)

鹿児島県内、広がる交流

❶鹿児島地域

美味のまち鹿児島

（鹿児島県料飲業生活衛生同業組合 理事長　岩重一郎さん）

昨年3月の新幹線の全線開業に合わせて鹿児島市の飲食店を中心に鹿児島県産黒豚をベースにした「黒豚わっぜえか丼」がリニューアルされました。鹿児島弁で〝すごい〟という意味の〝わっぜえか〟にちなんで名付けられた丼は、それぞれの飲食店のオリジナルレシピで作られています。「鹿児島の玄関口でもある鹿児島市で手軽に満足してもらえる鹿児島らしい料理として考えました。食は、旅行の中でも大きな楽しみの一つ。食を目当てに鹿児島に来るお客さまにも満足してもらえる丼ができたと思います。ボリューム、食材、味と、どの丼にも〝わっぜえか〟がたくさん詰まっています」と岩重理事長。〝美味のまち鹿児島〟と称して「食」をテーマとした新たな「鹿児島の味力」づくりに取り組んでいます。

「黒豚わっぜえか丼は、のぼり（写真後方）を目印にお越しください」と岩重さん

Kagoshima

❷南薩地域

指宿が一つになったおもてなし

（指宿市立指宿商業高等学校）

指宿市では、毎週金曜日を「いぶすきの日」として、県内外からのお客さまをお迎えしています。その取り組みの一つに、指宿商業高校の17人の生徒で結成された「指宿茶いっぺプロジェクト（ＩＣＰ）」による活動があります。鹿児島に昔から伝わる「おもてなし」の心でお客さまをお迎えしようと、ＪＲ指宿駅でお茶の振る舞いを行っています。このほかにも、ＪＲ九州発行の月例ポスター「おでかけ情報」の「指商発ＩＣＰコーナー」は、生徒が交代で取材や原稿作成を担当し、指宿の魅力の詰まった観光情報を届けています。「お客さまとの触れ合いや取材を通して、あらためて指宿の良さを知ることができました。反対に、お客さまに良さを教えてもらうこともあります」とメンバーの松木咲生望さん。このほかにも、〝観光列車指宿のたまて箱〟を見かけたら手を振るなどの活動を通して、今後も指宿が一体となったおもてなしを目指しています。

JR九州発行の月例ポスター「おでかけ情報」。下部分のスペースをメンバーが担当しています

JR指宿駅で観光客をお迎えするメンバー

Nansatsu

❸北薩地域

駅弁が心をつなぐ

（株式会社松栄軒 社長　松山幸右さん）

出水市を拠点に80年以上にわたって駅弁を製造販売してきた松栄軒。ＪＲ出水駅の観光特産品館「飛来里」にも、人気の「えびめし」や、「極黒豚めし」など黒豚を使った評判のお弁当が並びます。

出水駅のほかに、鹿児島中央駅や博多駅にも店舗を持つ松栄軒では、昨年3月の全線開業を機に売上高が大幅にアップしました。「観光客の増加により旅行会社からの注文や車内販売が大幅に伸びました」と話す松山社長。「鹿児島は、食材の宝庫。県外のお客さまには知られていない、鹿児島ならではの食材の掘り起こしにも力を入れています。鹿児島を感じられ、旅の思い出になる駅弁を開発していきたいです」とさらなる成長を目指しています。

「県内産の食材を使用したお弁当で鹿児島をPRしていきたい」と松山さん

鹿児島の食材が詰まったお弁当

Hokusatsu

④姶良・伊佐地域

長い目で見た観光地づくり

（霧島市観光協会
会長 徳重克彦さん）

温泉、自然、歴史、文化と季節を問わず楽しんでいただけるスポットの多い霧島。昨年1月に起こった新燃岳の噴火は、そんな霧島に大きな打撃を与えることになり、風評被害により観光客が前年の3割まで落ち込んだといいます。「再び活気を取り戻すために、温泉街を挙げてサービスの向上、語学学習などスキルアップに取り組みました。今後は、温泉観光士の養成講座なども実施予定です」と徳重会長。新幹線の開業も追い風となり、今では、たくさんのお客さまにも来ていただいており、観光情報誌でも人気温泉地として、多くの支持を得ています。「新燃岳の噴火を心配されるお客さまにも安心して来ていただけるように、防災対策も徹底しています」と今後の観光客の増加に期待しています。

災害を通して、新たなチャレンジを始めた霧島。火山と共存しながら、この地域ならではの観光地づくりを目指しています。

「お客さまをスムーズに目的地にご案内するための二次アクセスの整備にも取り組んでいきたいです」と徳重さん

Aira, Isa

⑤大隅地域

魅力的な町に

（NPO法人豊栄ひっとべ会
理事長 尾方広之さん）

東串良町の豊栄商店街。かつては、商人の町として栄えていたこの町も今では過疎化や後継者不足などの影響で商店街の空洞化が進んでいます。今から8年前、商店主による町おこしが始まり、鹿児島に古くから伝わる「泣こかい 跳ぼかい 泣こよかひっ跳べ（考えている暇があったら実行せよ）」という言葉にちなんだ「豊栄ひっとべ会」を設立。毎月第3水曜日に開催される「豊栄ひっとべデー」では、地元の特産品販売や体験活動を行い、地域活性化に取り組んでいます。「今では大隅地域を一つのフィールドと考え、近隣の市町と連携して観光客誘致にも取り組んでいます」と尾方理事長。「大隅は古代の遺跡から最先端の宇宙空間観測所まで見どころも多く、食べ物もおいしい場所。元気のある大隅をPRできれば、それを聞きつけた人たちが新幹線を利用して大隅に来てみたいと思うのではないでしょうか」と、長い目で見た観光地づくりを目指しています。

尾方さん(左)と副会長の尾上朋子さん(右)

Osumi

⑥熊毛地域

食の発信

（有限会社菓子処酒井屋
代表取締役 酒井通雄さん）

種子島の特産品である安納芋や紫芋を使ったグラッセなどのお菓子が自慢の西之表市の菓子処酒井屋では、昨年の新幹線の全線開業に合わせて新店舗の出店と工場拡大を行いました。「これを機に島外や県外への販路拡大も進めていきたいと思っています」と話す酒井社長。「そのためには、県内外の物産展や商談会への参加も重要だと思っています。鹿児島の食を発信し、鹿児島を知って興味を持ってもらうことも集客への一歩ではないでしょうか」と情報の発信に意欲を見せています。

「種子島には、焼酎や芋などおいしいものがたくさんあります」と酒井さん

種子島の特産品を使用したお菓子

Kumage

⑦大島地域

移動時間も旅の要素

（奄美の観光・物産一元的組織設立準備委員会
プロジェクトリーダー 松元英雄さん）

奄美群島の力を結集して全国に情報発信し、観光物産活性化のための一元化組織として4月に設立される奄美群島観光物産協会。島間のコミュニケーションを強化し、方向性を合わせていくとともに、各島の観光の顔として島々の魅力を適切に伝えることができる島コーディネーターの育成なども目指しています。「奄美は、歴史や文化なども関東や関西とは異質なものがあり、旅をする人をエキゾチックな気分にしてくれる場所だと思います」と話すのはプロジェクトリーダーの松元さん。「陸・海・空とバラエティーに富んだ交通機関を利用しての旅は、移動の過程も十分に観光素材になると思います。時間はかかるし、決して料金も安くはありませんが思い出に残る旅ができると思います。奄美群島ならではの旅のコンセプトで臨んでいきたいです」と話してくれました。

「奄美には、まだまだ魅力がたくさんあります。島々の宝を発掘して全国に発信していきたい」と松元さん

Oshima